資料No.２

新潟県三条市立大崎学園　視察概要

日　時　令和５年９月２５日（月）１３：２０～１６：００
参加者　２１名（審議会委員１２名、副町長、教育長、教育委員４名、事務局３名）

【　質疑応答　】

Ｑ１：義務教育学校になったことで、教員の負担が増えていないか。

Ａ１：確かに準備段階も含め負担が増える面はあるが、後期生徒（中学生）の問題行動等への対応は間違いなく減っている。

Ｑ２：小中の教員の連携は。

Ａ２：教員の連携は子どもたちにとって、すごく大事である。大崎学園は他の小中一貫校に比べて職員の交流が深く、一つの学校になっている。小学校でも中学校でもない、新しい学校、義務教育学校を創るという意識を持ってやっている。小中の教員が一緒になって教科チームを作り、授業研究や問題作成、乗り入れ授業などを行っている。

Ｑ３：市全体で教員の意識改革、研修はどのように取り組まれているか。

Ａ３：９つの学園でそれぞれに小中一貫教育のグランドデザインを持ち、教員の交流機会を作っている。また、市外からの転入、新任の教員へは丁寧にプレゼンテーションを行い、小中一貫教育への理解促進に努めている。

Ｑ４：副校長、教頭の役割分担は。

Ａ４：副校長は教頭格であるが、小中ともに経験している（基本的に小学校畑）ことから、両方を見ており、教頭は前期後期それぞれに充てている。（校長は中学校畑）

Ｑ５：市内の他の校舎一体型の２校が義務教育学校へ移行していない理由は。

Ａ５：平成２５年度から全小中学校で小中一貫教育を実施している。（校舎一体型の２校のうち、三条嵐南学園は平成２５年に小中併設の校舎を新築、一ノ木戸ポプラ学園は中学校棟が昭和４５年築、小学校棟を併設して平成２４年に新築している。この当時はまだ義務教育学校が制度化されていない。）大崎学園はまだ開校から６年である。三条市では将来的には全校を義務教育学校ということを掲げているが、大崎学園の開校時に入学した子どもたちが卒業した後で、検証を始められると考えている。

Ｑ６：カリキュラム編成（４．３．２制など）はどのようにされているのか。

Ａ６：基本的には小学校は小学校、中学校は中学校で編制している。本来特例で変更はできるが、途中での転出入も想定し、基本６年生で一旦終わらせ、修了式を実施している。入学・卒業式は１回のみである。

Ｑ７：小中の交流はどのように進めているか。

Ａ７：当初は体育祭も文化祭も合同実施としていたが、発達段階に応じた競技が必要であること、時間の問題、駐車場の確保、またコロナ禍にもなり、現在、体育祭はそれぞれ、

文化祭は２日間で実施している。体育祭では前期生が応援で参加、文化祭では５．６年生が後期生の合唱を鑑賞、審査にも参加している。また、５．６年生は生徒会の立会演説会に参加、６年生は投票も行っている。その他にも可能な範囲で交流の機会を作っているが、自然と後期生は低学年児童と話す際には目線を合わせるなど配慮し、挨拶や傘の水切りなど何気ない所作や言動において上級生としての自覚が見られ、このことが問題行動の減少につながっているものと感じている。前期生の面倒を見るのが後期生にとっては当たり前となっている。また、前期生も後期生と合同の場で発表や委員会の報告を行う機会があり、成長につながっている。

Ｑ８：他地区で不登校となった子どもたちの転入もあるとのことだが。

Ａ８：積極的に受け入れをしているものではないが、口コミなどで転入される方がいる。中１ギャップが解消され不登校は少ないが、全くないわけではない。

Ｑ９：義務教育学校への移行により、地域や学校の伝統行事などはどのようにされているのか。

Ａ９：伝統行事は精選して実施している。大崎学園がＰＴＡではなく、ＰＴＣＡの活動がある。Ｃはコミュニティ、地域が行事運営に積極的に関わっていただいており、行事には先生方も顔は出すが、企画運営のすべてを地域が担っている。

Q10：制服や体操服はどうされているか。

A10：義務教育学校移行時に後期生は制服を一新し、前期生は私服とした。体操服の基本デザインは同じくしている。